53

三宅春齢『補憾録』再考

青木　歳幸
佐賀大学地域学歴史文化研究センター／佐賀大学特命教授

『補憾録』は，広島藩家老上田氏医師の三宅春齢（董庵）が記した種痘実施記録である．千葉大学附属図書館医学部亥鼻分館所蔵の嘉永3年（1850）5月春齢自序の『有喜全書　補憾録　四』（『補憾録』Aとする）と，嘉永6年（1853）3月に門下生にむけて頒布というかたちで刊行された『牛痘経験補憾録』（『補憾録』B）の2種がある．

三宅春齢（1814–1859）は，広島城下猿楽町の医師三宅西涯の次男に生まれ，医や儒学を父や亀井昭陽，廣瀬淡窓らに学び，号を董庵，有喜斎という．広島藩領への種痘は，嘉永2年（1849）9月21日に，佐渡の医師長野秋甫が長崎で牛痘苗を得て，帰途に頼聿庵の7歳男児に種痘を施したのが最初で，春齢は嘉永2年から仲間と社中を結成し，種痘を普及させた（青木歳幸「広島藩領の種痘」『天然痘との闘いII―西日本の種痘』，岩田書院，2021年所収）．

『補憾録』Aには，嘉永2年9月からの広島藩領への種痘伝播の経過と，在村蘭方医らの牛痘に関する情報収集や治験がよく描かれており，新知見も多く含んでいるので，このほど千葉大学医学部所蔵本をもとに全文翻刻をした（青木歳幸「広島城下医師三宅春齢の『補憾録』，『史料・西日本の種痘』，佐賀大学地域学歴史文化研究センター，2021年3月，非売品）．本報告はこの研究成果の一部である．

春齢は，「府下牛痘ノ興廃」では，佐渡の医師長野秋甫，明石藩医松浦元琱らの種痘と自らの結社で161人への種痘や，藩による禁止を経て再開したこと，緒方洪庵や新宮凉庭らの種痘普及活動や今治の種痘禁止などを紹介している．「接種ノ譬喩」では，牛痘が人体に悪影響を及ぼさないのは，接木が元の「砧木（台木）」の性質を受け継がないのと同様であるとの自説を述べている．「牛痘ノ軽微ナル徴候」では，牛蝨や牛尿，牛肉などが，古来から天然痘治療に使われてきたことを『本草綱目』や『引痘略』，『保赤全書』などから抄出し，庶民の不安を解消しようとしている．

「牛痘天然痘三児ノ医案」では，161人に接種したが，天然痘に罹患し死亡した3人の医案を記し，牛痘苗接種後に，天然痘や麻疹などに罹患することの防止のために，フーフェラントの説を堀内素堂の『幼々精義痘瘡編』から抜粋して研究を深めている．「牛ニ生スル痘ノ諸説三条」では，浜田領の屠者勇次郎が牛痘を発見したという話や，安芸高宮郡郡医織田以仁が，犢牛を購入して春齢から分与された痘苗を犢牛にうえつけ牛痘を得ようとする再帰牛痘法の実験，小山蓬洲（肆成）の牛化人痘法を紹介し，「親試セサレハ以テ信トナシ難シ」と評している．「高橋氏の話」では，江戸の大槻俊斎，伊東玄朴，京都の日野鼎哉，摂津の緒方洪庵らの種痘活動を伝聞紹介し，緒方洪庵とは書翰による種痘問答を交わしている．「魯西亜伝牛痘種法之記」では中川五郎治の牛痘法を紹介し，「長藩引痘施術ノ聞書」では，長州藩は好生館にて侍医14人が毎8日に一会し，百余人に接種したと記し，「引痘ノ後瘡瘍遷延ノ経験」では，嘉永4年11月までに1300余人への接種を記している．

末尾の「真仮小説」において，諸説を学ぶにあたって「畢竟是レ博ク術ヲ行ヒ多ク験ヲ歴ル者ニ非レハ，自ラ其心ニ解スルコト不能者ニシテ，筆端ノ能ク尽ス所ニ非ス」と述べ，天然痘と闘う医師としての心構えは多く実験をしたうえでないと，本当には理解できないという実証的なものであった．